

この話には、ひとりの父親と、その兄息子と弟息子が登場します。この兄弟を見つめる父親は、父なる神様です。

弟息子は、自由で楽しくて刺激的な人生を望みました。彼は父親から相続財産の取り分を受け取ると遠い街に行き、散財した結果、一文無しになります。彼は深く反省し、父親のところに帰ることを決意します。

父親は弟息子を心配し、彼が帰ってくるのを待っていました。ある日、その姿を見た時、父親は走り寄って彼を迎えました。弟息子が「これからは雇い人として働かせて…」と言おうとするのを制止して、彼に上着を着せ・靴を履かせ、彼を喜んで迎えて大宴会を設けました。

父なる神様は、この父親のように、ご自分から離れた者たちを待っておられます。もし自分が神様から離れていると感じておられるなら、恐れることはありません。ぜひ教会に来て、神様のもとに帰ってきてください。あなたの生き方がどんなに自己中心的で、人を傷つけたものであったとしても、神様はあなたを喜んで迎えてくださいます。主イエス様によってその罪を赦し、神の子どもとして受け入れてくださいます。

兄息子は、ずっと父親のもとにいて、父親の仕事を手伝っていました。彼は親孝行で誠実な人のように見えました。しかし兄息子も、父親に背を向けて生きていたのです。彼は自分にも他人にも厳しいルールを課したために、まわりの人々を心の中で批判していました。特に父親が弟息子を赦して、大宴会を設けたことは、兄息子の逆鱗に触れました。彼は父親に食って掛かり、怒りのあまり家に入ろうとしませんでした。人は兄息子のように、自分に厳しく生きることや・自分の筋を通すことで、神様から離れることがあります。これも一種の自己中心です。

父親は兄息子に「いろいろなだめてみた」とあります。自分は間違っていない・自分の筋は通っていると主張する人に対して、神様はその人に寄り添い、その人が自分の狭い考えに気付くまで、時間をかけて働きかけてくださいます。

弟息子と兄息子は、正反対のように見えます。弟は楽しさや自由を求め、兄は正しさを求めました。しかし共通しているのは、人に愛されたいということでした。人に受け入れてもらいたい。友だちになって欲しい。認めてもらいたい。誰もが、そういう承認欲求を持っています。しかし、どんなに人に愛されることを求めても、その欲求は満たされないでしょう。むしろ、愛されることを求めれば求めるほど、人から愛されなくなるのではないのでしょうか。私たちは、人に愛を求め過ぎて、傷ついているのではないのでしょうか。

神様は、私たちが愛を必要としているのをご存知です。神様は今も、私たちが愛しておられます。私たちが喜んで受け入れ、また私たちの怒りを和らげようとしてくださいます。そして神様の愛に生きるように、私たちが招いておられます。教会は兄息子と弟息子が父親の愛によってつなぎ合わされたように、お互いにタイプの違う者たちが主イエス様の愛を受けて、そして家族になる場所です。私たちの人生は、神様の愛によって彩られ、豊かにされていくのです。